

第20表 業態別食材料費および比率

	金額(円)		構成比(%)		対前年比(%)	
	農家世帯	非農家世帯	農家世帯	非農家世帯	農家世帯	非農家世帯
総額	149.80	194.83	100	100	(+)14.7	(+)14.0
穀類	45.82	42.38	30.6	21.8	(+) 6.7	(+) 2.0
いも類	5.73	4.87	3.8	2.5	(+) 8.3	(+) 3.4
油脂類	1.55	2.96	1.1	1.5	(+) 4.7	(+) 1.4
豆類	8.45	8.69	5.7	4.5	(+)16.4	(+)14.3
魚介類	21.91	30.40	14.6	15.6	(+)14.3	(+)20.6
肉・卵・乳	15.35	37.12	10.2	19.1	(+) 1.4	(+) 7.3
野菜類	17.03	19.84	11.4	10.1	(+)22.5	(+)28.8
果実類	11.44	17.55	7.6	9.0	(+)38.5	(+)39.2
その他の	22.51	31.05	15.0	16.0	(+)19.2	(+)10.1

いで魚介類14.6%、野菜類11.4%、肉卵乳類10.2%となっている。

次に農家世帯を細分した結果についてみると常用勤労者のいる農家世帯が155.58円で最も高く、食品群別にみると肉卵乳類及び調味嗜好食品を主とする其他食品の支出が他の農家世帯を上回っている。

農家世帯の中でも専業主婦の食材料費は146.25円で最も低く、動物性食品、果実類等の支出が他業態に比べて下回っている。

(ロ) 非農家世帯

非農家世帯の食材料費は194.83円である。

食品群別に支出構成をみると穀類が21.8%で最も高く次いで肉卵乳類19.1%が調味嗜好品等の其他食品が魚介類15.6%、野菜類10.1%となっており、其他食品が上位を占めていることが目立っている。

次に非農家世帯を細分調査した結果についてみると常用勤労者世帯が199.46円で最も高く、次いで事業経営者世帯は196.62円となっているが、非農家世帯の中でも日雇・家内労働者世帯は155.72円である。

食品群別にみると常用勤労者世帯と事業経営者世帯は肉卵乳類、魚介類、其他食品の支出金額が他の業態を大きく引きはなしているのが目立っている。

3. 支出階層別食材料費

1人1日当りの食費は、第Ⅰ階層137円79銭 第Ⅱ階層178円79銭 第Ⅲ階層226円61銭 第Ⅳ階層257円21銭、第Ⅴ階層286円18銭となっており、第Ⅱ階層5,000円～9,999円の階層が全国平均にはほぼ等しい。

4. 地域ブロック別食材料費

地域ブロック別の食材料費についてみると七大都市が226.70円で最も高く全国平均を(+)25.8%上回っている。次いで近畿・中国は188.97円で全国平均を(+)4.9%、関東・甲信は184.94円で全国平均を(+)2.7%と上回っているが、その他の地域については、全国平均食材料費に比べて、東海・北陸・越は(-)6.0%、北海道・東北は(-)9.2%、四国・九州は(-)17.8%といずれも下回っている。

F 身体 の 状 況

1. 栄養欠陥による身体症候

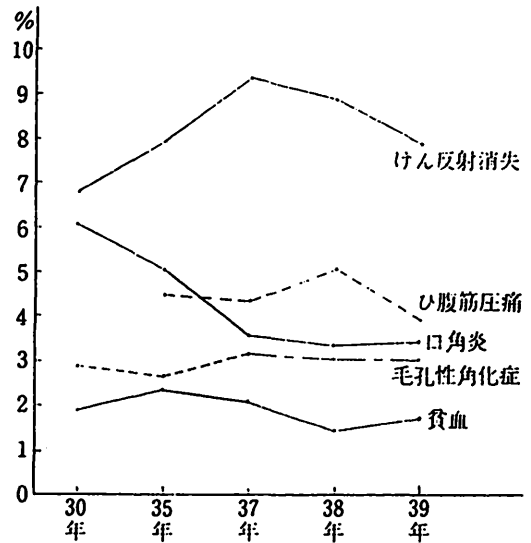
昭和39年度における国民の栄養欠陥に関係があると考えられる身体症候の発現率(有症者の割合)は

18.6%で前年度の発現率20.5%を若干下回る結果を示した。

各症候別に発現の傾向をみると最も高率に発現しているのはビタミンB₁欠乏時の症候と関係があるとみられるけん反射消失とひ腹筋圧痛でそれぞれ7.8%、3.9%の発現率であるが、これらの症候は前年度に比べてかなり減少の傾向を示している。次いで発現率の高い症候はビタミンB₂欠乏と関係のあるとみられる口角炎とビタミンA欠乏に関係する毛孔性角化症で、それぞれ3.5%、3.1%を示し、前年度と比較しては特に増減はみられない。

最近5カ年間の推移をみると第12図に示すように、けん反射消失、ひ腹筋圧痛、口角炎、貧血の低下傾向をみることができる。

第12図 身体症候発現率（年次推移）全国



第21表

身体症候発現率

単位=%

病 候 別	全 国		対 前 年 増 減
	38 年	39 年	
健 康 者	79.5	81.4	+ 1.9
有 症 者	20.5	18.6	- 1.9
貧 血	1.7	1.8	+ 0.1
口 角 炎	3.3	3.5	+ 0.2
毛 孔 性 角 化 症	3.3	3.1	- 0.2
け ん 反 射 消 失	9.1	7.8	- 1.3
ひ 腹 筋 圧 痛	5.0	3.9	- 1.1
浮 腫	3.0	2.4	- 0.6

身体症候の発現状況を年齢階級別にみると従前と同様に口角炎は5～9才に最も高く、毛孔性角化症は10～19才に高率にみられ、他の症候は年齢の増すごとに高くなる発現状態を示している。前年に比べ20才以上の成人におけるけん反射消失、ひ腹筋圧痛の低下が顕著である。性別に発現状況をみると、従前同様に男子に比べて女子の有症率が高く、男子の14.8%に対して女子は21.7%を示している。

業態別に身体症候の発現状況をみると有症率は農家世帯は20.9%、非農家世帯17.4%で前年に比べて両業態ともに低下している。

症候別にみると両業態ともけん反射消失が最も高く農家世帯7.9%、非農家世帯7.7%となっている。

次いでひ腹筋圧痛が農家世帯4.4%、非農家世帯3.6%である。農家、非農家間で特に著しい差のある症候は口角炎で農家世帯の5.2%に対し非農家世帯は2.6%となっている。

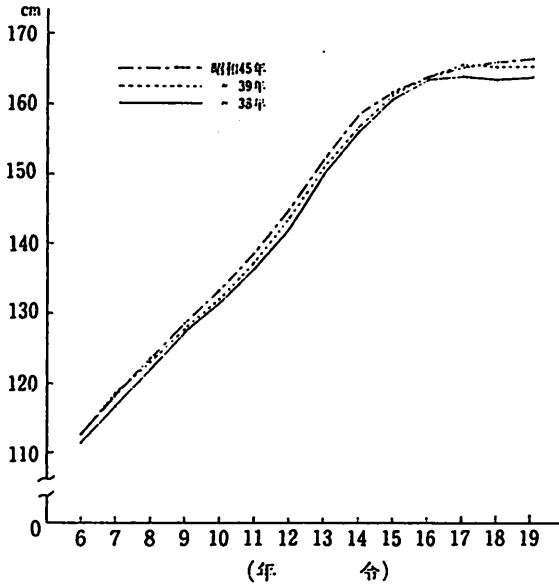
2. 体 位

昭和39年度における国民の体位についてみると前年に引き続き青少年の体位は順調な伸びを示してい

る。

男子の身長について年次推移をみると第13図に示すように、昭和38年、39年と顕著な増加が認められ、

第13図 男子身長昭和45年の推計値との比較

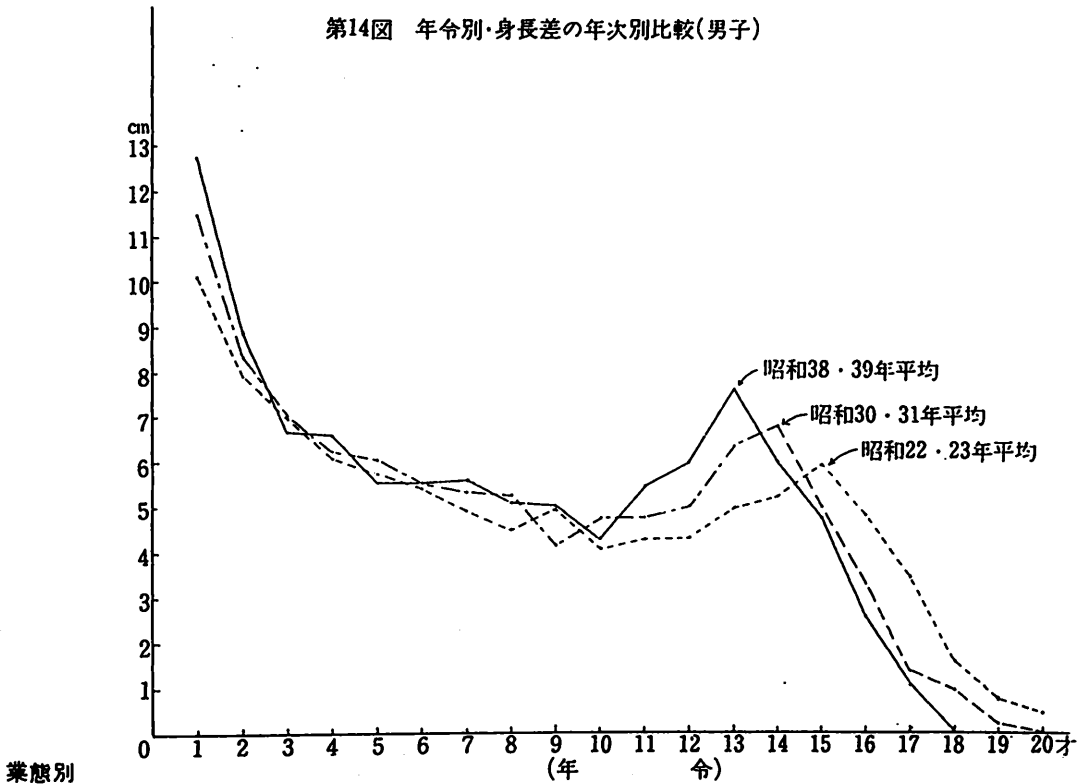


39年の身長曲線は昭和45年の推計値に著しく接近している。

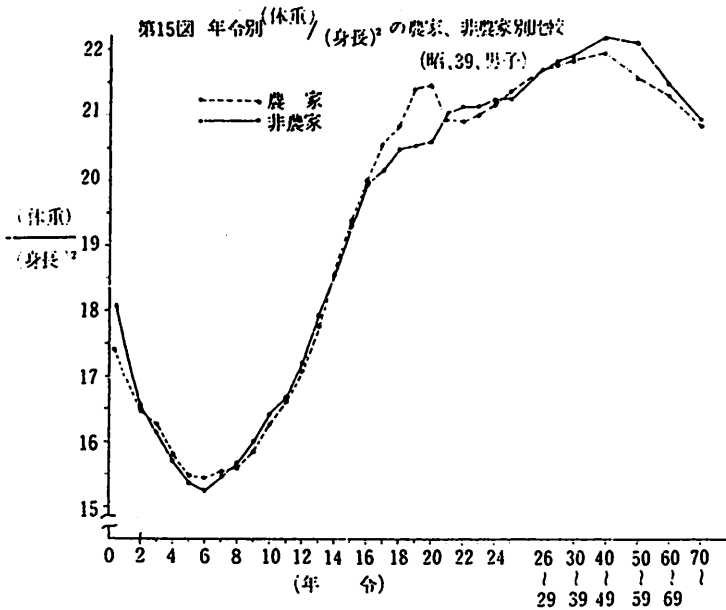
この身長の年次推移を年次毎の横断的年令別身長増加曲線の上から観察してみると第14図のようである。

本図は昭和22~23年、30~31年、38~39年の各2年ごとの各年令身長平均値の年令別身長差を示したものである。顕著な傾向としては、第1に0~1才間における身長増加量の年次の差異の著しいこと、第2の思春期前11才頃から思春期に至る発育増加速度の年次の増大即ち思春期における発育量の急激な増大と思春期発動の早期化の傾向がみられることである。女も同様な傾向にある。

第14図 年令別・身長差の年次別比較(男子)

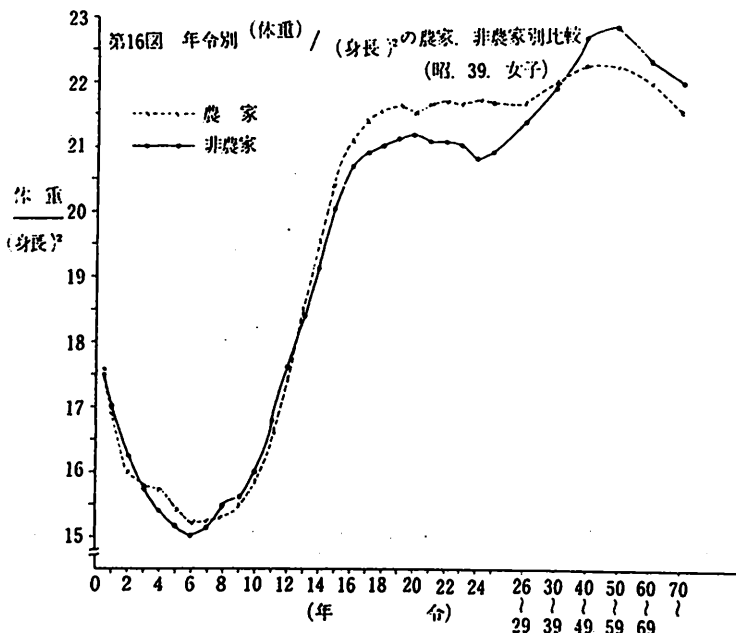


業態別に体位を比較してみると第15図に明らかなとおり非農家世帯は農家世帯に比べて身長、体重ともに青少年の発育は良好である。



体重の年令別変化を (体重)/(身長)² (カウプ指数) を用いて業態別に比較してみると、男子においては第15図のように顕著な差異は17才から20才までの年令階級において非農家世帯が農家世帯に比し劣り、30才代以降においては、非農家世帯が農家世帯より高い傾向を示す。

女子においては14才から30才未満にかけて非農家世帯は農家世帯に較べ著しく低く、40才代以上では非農家世帯が増大する傾向を示す。次にカウプ指数の年次変化を示すと、第15、16図にみられるように、非農家世帯においては男子は17~20才において39年度は35年度より低下し、26才代以降では39年が35年より大となっている。女子では15才より20才にかけて39年は35年より低くなり、40才代以降では39年が高くな



っている。

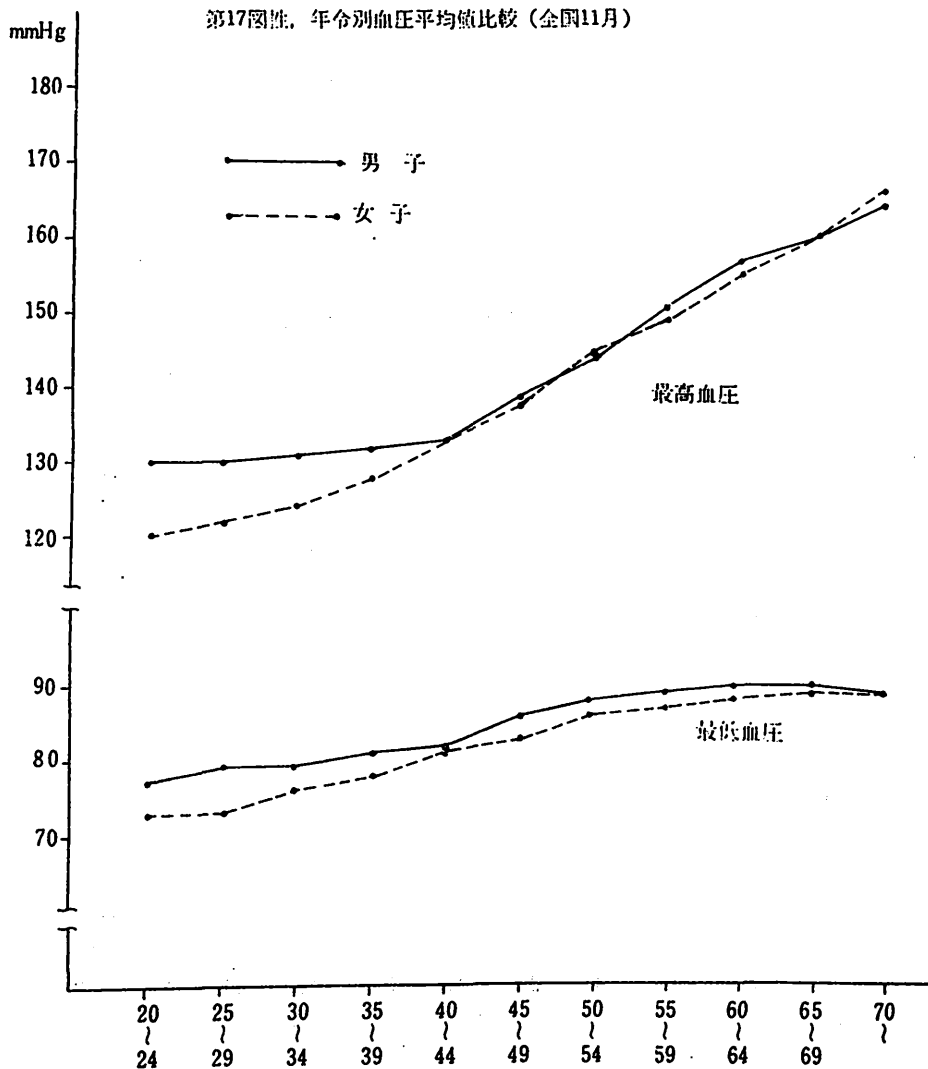
農家世帯においては男子の場合21才から25才までの青年層において39年度は35年度より著しく低下し、50才代以上では39年が35年より高くなっている。女子の場合は17才より25才にかけて39年度は著しく低くなっている。

非農家及び農家世帯の男子年齢別比胸囲の年次変化においてもカウプ指数の年次変化と年令的に一致する傾向をみることができる。

3. 血 圧

昭和39年度調査における血圧の平均値について性別、年齢階級別にみると第17図のとおりで男子の最高血圧は40~44才までは余り大きな変化はないが、それ以後は年齢とともに上昇し70才以上では165mmHgに達する。

最低血圧については、男女ともに年齢が増すにしたがって上昇するが、その上昇率は極めて緩慢である。



なお、これらの一般的傾向は最近数年間の推移（略）と全く同様である。

血圧（業態別）

血圧平均値の成績を業態別に比較すると農家、非農家の両世帯間に特に大きな差異はみとめられない。

4. 握 力

昭和39年度にはじめて実施した握力の平均値は第18図のとおりで、男子の場合10～14才は22.4kgであり、15～19才になると39.5kgと急激に高くなり、20～24才は43.4kgで最高値を示すが、その後は年齢の高くなるに従って握力値は緩慢ながら低下する傾向を示している。

次に女子にあっては、10～14才は男子に比べて余り差はないが、15～19才になると25.0kgで男子の39.5kgに比べて著しく下回っている。15～19才以後は男子のように明らかな上昇の山を作らず大差なく経過し40才以降に低下する傾向を示している。

第18図 性・年齢別握力比較（全国）

